米軍艦を包囲するＵＦＯ群



2019年7月15日

～海に突入！米国サンディエゴ沖、計100機と遭遇！！～

2019年7月15日夜、米カリフォルニア州サンディエゴ沖で、球状の物体が1時間以上にわたり米海軍艦と並走、さらには降下し海中へ突入するという“トランスメディウムビークル”（複数の空間を移動する未確認の航空機）をUSSオマハが捉えた。

この様子はドキュメンタリー映画監督のジェレミー・コーベル氏が、USSオマハのデッキから撮影したビデオ映像、及びオマハ艦内のCIC※1でVIPERチーム※2によって撮影された赤外線カメラ映像、さらに裏付けとなるレーダーデータ映像を自身のSNSで公開し、MYSTERY WIREをはじめNBC Newsなど多くのメディアがこの事件を報じた。

映像は米海軍の正式な記録映像であり、米国防総省UAPTF※3が現在進行中の調査に含めている。

サンディエゴ沖では、2019年7月14・15日を中心に米海軍艦含む9隻が未知の物体と遭遇しており、一連の出来事は周囲100マイル（160km）の範囲内で計50～100もの接触があったとされている。

一説には風船やドローンと言われているが、その可能性はあるのだろうか。

事件の詳細とともに本事件の事実を明らかにする。

※1　CIC（Combat Information Center：戦闘情報センター）：軍艦における戦闘情報中枢のことで、レーダーやソナー、通信など、自艦の状態に関する情報が集約される部署であり、指揮・発令も行う。
多くの機密情報を扱うため、運用時間中は乗組員であっても立ち入りには制限が加えられる。

※2　VIPERチーム（Visual Information Personal）：異常や危険な出来事を記録・撮影するチーム。

※3　UAPTF（The Unidentified Aerial Phenomena Task Force）：米軍が観測した数々の原因不明の事件を受け、UFO（UAP：未確認航空現象）の調査を専門に担うため米国防総省が2020年8月に創設。
米国の国家安全保障に脅威を与える可能性のあるUAPを検出、分析、カタログ化することを目的としている。

★事件詳細

海軍の記録映像を公開したドキュメンタリー映画監督ジェレミー・コーベル氏のホームページや、コーベル氏にインタビューし事件を報じた米ニュースサイトMYSTERY WIRE、アメリカの情報公開法FOIAの要請により開示された関係船舶のデッキログ等をもとに事件を報じたオンラインマガジンThe WAR ZONEによると、2019年7月、サンディエゴ沖では米海軍艦を含む9隻（USSキッド、USSジョン・フィン、USSラファエル・ペラルタ、USSラッセル、USSオマハ、クルーズ船カーニバルイマジネーション他）が計50～100の未知の物体と遭遇したことが明らかとなった。

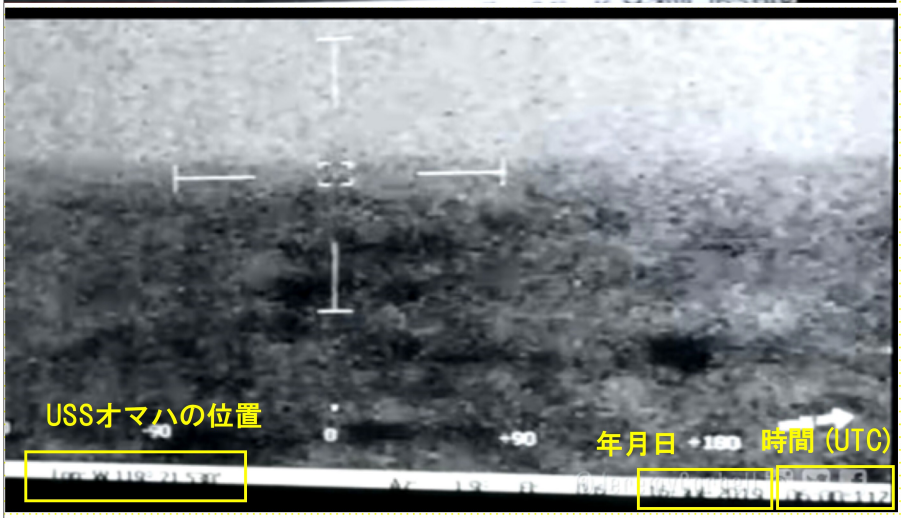
7月15日夜、警戒区域を運航中の独立型リトラル戦闘艦USSオマハ(LCS-12)はそのうちの一隻であり、少なくとも14の物体と遭遇していた。

音声記録の一部によると、物体のうち１つは速度46ノット(85.2km/h)から50ノット(92.6km/h)に加速し138ノット(255.6km/h)を記録、そこで方向を変えている。

USSオマハ赤外線センサー(Sea FLIR AN/KAX-2 EO/IR)映像 ［動画:ジェレミー・コーベル氏YouTube　https://youtu.be/YAIY8jteU_E ］



60秒の撮影動画中12秒目の画面。
海上を飛行するUFO。
音声記録によると海上は風が強く6フィートのうねりがあった。



60秒の撮影動画中55秒目の画面。
UFOは海中へ降下する。
ディスプレイ左下にはUSSオマハの位置を表す座標の一部 W119° 21’53.0” が映っており、右下には時間(UTC世界協定時)06-00-112と年月日16-Jul-2019が映っている。
アメリカは広大なため国の中でタイムゾーンが分かれており、サンディエゴ沖はPDT(太平洋夏時間UTC-7)であるため、2019年7月15日の夜11時を表している。

※赤外線センサー映像は夜間に撮影されたため映像が荒くみえる。
※FLIRとは、遠赤外線（熱赤外線）を検知して、画像上のピクセルの輝度によって、観測領域の温度分布を表示でき、モノクロ表示で周囲と温度差のある部分を白（または黒）で強調して表示する。
常温範囲内の目標は、主として遠赤外線（波長6～15マイクロメートル）の領域で熱放射する(気体・液体・固体を構成する原子や分子から、温度に依存する電磁波が放出されていること)。
FLIRはこの領域の光を検知することで、光源の有無に関わらず使用でき、温度や赤外線放射率によって物体を精査することも可能。最大対気速度217ノット・測定範囲180km。

また、物体のうち1つは、翼や尾翼のない球状で直径は推定6フィート(1.8m)以上の自照式の物体であった。

物体は1時間以上USSオマハと並走した後、午後11時USSオマハが 32° 29’21.9” N 119° 21’53.0” Wの地点で損傷することなく海へと降下した。

この様子を前方監視型赤外線装置(Sea FLIR AN/KAX-2 EO/IR)、及びレーダーシステム（Sea Giraffe AN/SPS-77・Bridge Master E Navigational RADAR）が捉え、艦内CIC内ではVIPERチームが映像を記録した。

USSオマハのレーダーシステムSea Giraffe AN/SPS-77は、Xバンドのシステムによってターゲットを捕捉している。

Xバンドレーダーとは、Xバンドと呼ばれるマイクロ波(25～37mm)を使ったレーダーで、主に軍事用・気象観測用に用いられており、周波数が短長波で、解像度と発信出力が大きい特徴から探知能力に優れている。

ミサイル防衛においての弾道ミサイルの捕捉・追尾などにも用いられており、霧や悪天候を切り抜けるように設計されている。



USSオマハ(LCS-12) 独立型リトラル戦闘艦
United States Navy
https://www.seaforces.org/usnships/lcs/LCS-12-USS-Omaha.htm

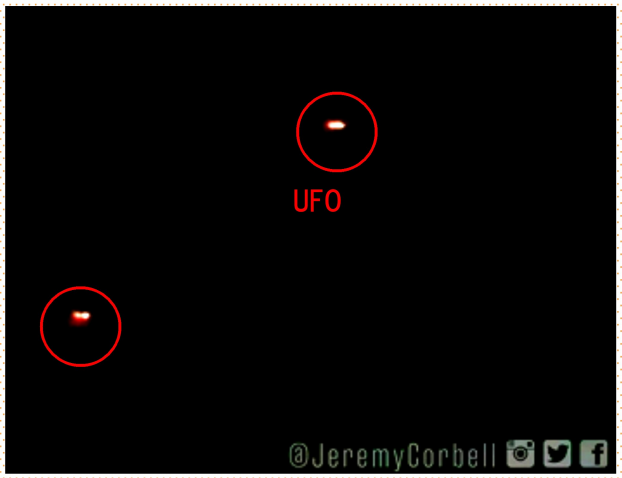
AN/SPS-77レーダーのレーダー計測距離は180km、水平線から高度20,000m（66,000ft）まで、70° までの空と地表の目標を探知可能、走査速度60rpmである。

複数の物体をレーダー上に捉えた46秒間のレーダー映像では、11秒目と14秒目で映っていた物体が１機ずつレーダーからなぜか外れる様子も捉えている。

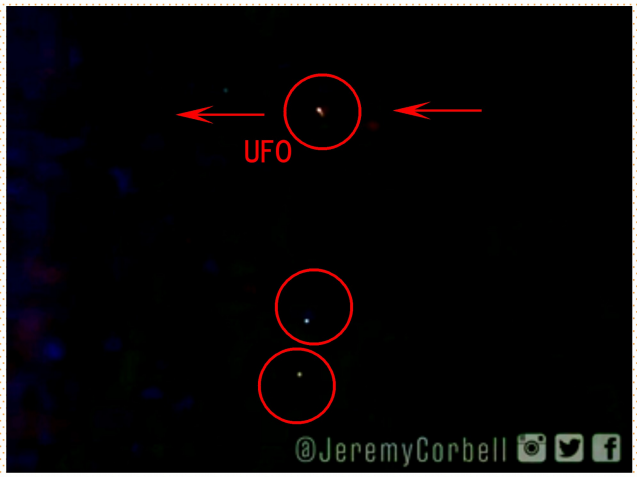
目標物がレーダーから外れるということは、レーダーの探知範囲外に物体が移動したか、海中に沈んだ、あるいはステルス性を発揮したということになる。

USSオマハ デッキから撮影された映像

［動画:ジェレミー・コーベル氏YouTube　https://youtu.be/YAIY8jteU_E ］



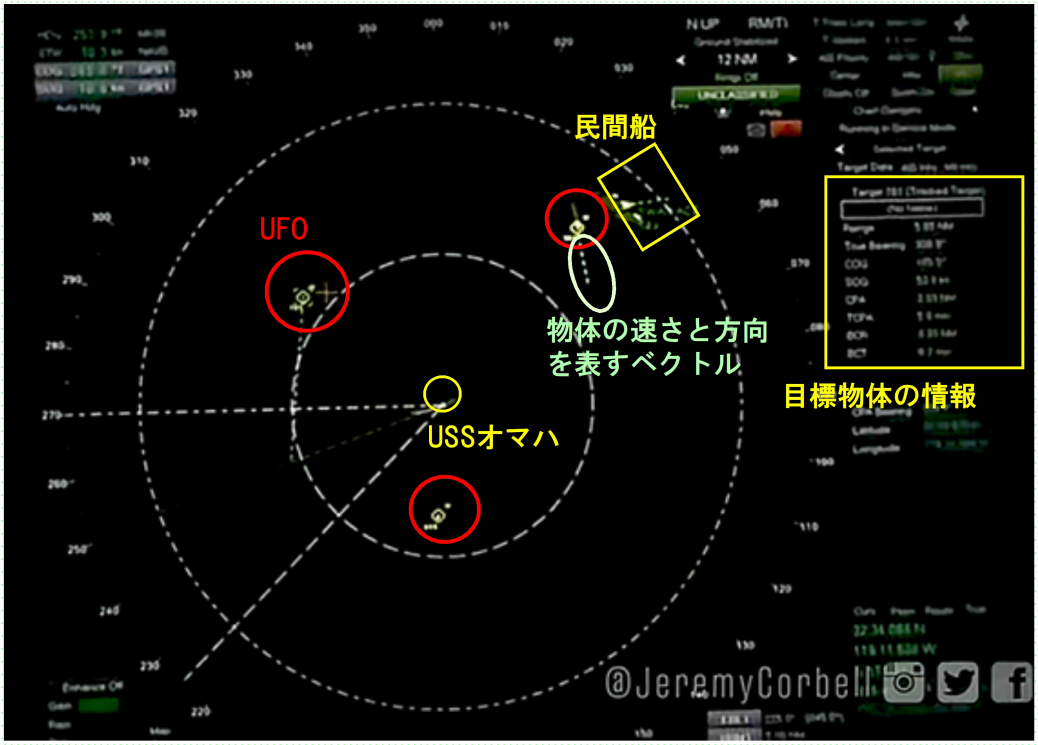
50秒の撮影動画中8秒目の画面。
赤く点滅しながら飛行する2機のUFOが映っている。



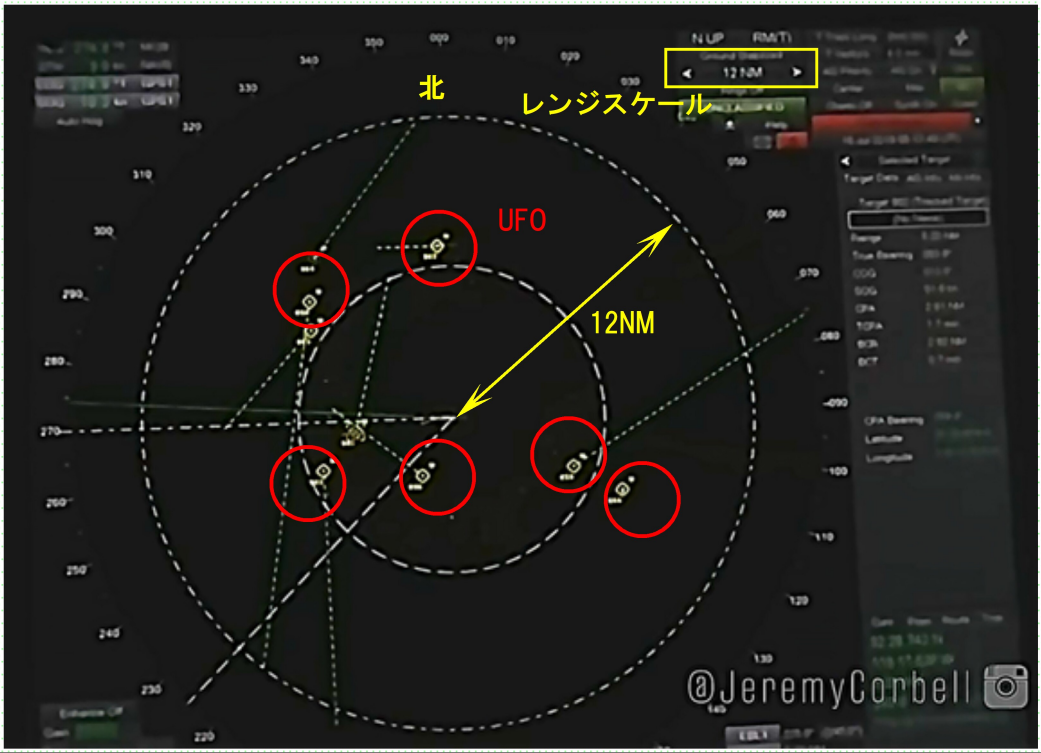
50秒の撮影動画中24秒目の画面。
画面右上方から左へと1機が高速で横切っていく様子が映っている。

USSオマハ　レーダー映像

［動画:ジェレミー・コーベル氏YouTube　https://youtu.be/YAIY8jteU_E ］



46秒の撮影動画中30秒目の画面。
USSオマハのレーダーシステムの1つであるBridge Master EのUser Guideによると、レーダーの中心点が自船（USSオマハ）であり、レーダーディスプレイには、自船や移動する目標物の速度と方向を示すベクトルが表示される。
ベクトルの長さは速度を、方位は方向を示す。
レーダーが捉えたUFO3機と民間船1隻が映っている。
捉えた目標物体の情報等は文字や数字がぼやけており、不明である。



46秒の撮影動画中44秒目の画面。
レーダー画面の真上が北である。オマハを中心に半径12NM(22.2km)の範囲で、複数のUFOを捉えており、速度と方向を表すベクトルが様々な方位に動いている。

★目撃物体の考えられる可能性

①自然大気現象(氷の結晶、湿気、気温の揺らぎが赤外線やレーダーのシステムに記録されたものなど) ②空中障害物(鳥、バルーンなど) ③米国政府産業開発プログラム(米国政府機関が開発中の物体や極秘プログラムがUAPとして誤認される場合) ④ドローン ⑤UFO (未確認飛行物体) が考えられる。

赤外線センサー映像からわかるように、球状の物体がはっきりと映し出されており、制御された動きをしていることから①②はいずれもあてはまらない。

目撃物体について、米国防総省UAPTFも調査中であることから、③はあてはまらない。

では、④ドローンはどうだろうか。

ドローンとは、無人航空機(unmanned aerial vehicle、UAV)のことで、FAAではUASと呼称している。

民間では、警備・測量・貨物輸送・農業の農薬散布・野生動物の生態調査や趣味の空撮など様々な面でドローンが使われている。

軍事用では、標的機・デコイ(敵を欺瞞して本物の目標と誤認させる目的で展開する装備の総称)・無人偵察機・無人哨戒機・無人攻撃機・実験機などの種類があり、動力は機体が大きいものは有人機と同じくガスタービンエンジン式やレシプロエンジン式、ジェットエンジン式である。

いずれのエンジン方式も排熱を伴うため、赤外線センサー映像にはそれに伴う排気プルームが映るはずであるが、目撃物体から排気プルームは確認できない。

軽量な小型機では電動式も存在するが、目撃物体は6フィート(1.8m)以上であり、1時間以上の長時間飛行をしていることから電動式とは考えられない。

また、ドローンの形状は固定翼機と回転翼機に大別され、国際宇宙ステーション内での使用を目的とした小型(直径15mm)球状ドローンのボールカメラ (Int-Ball) は存在するものの、6フィート以上の尾翼や翼・プロペラのない球状ドローンは存在していない。

さらに、物体は暗闇の海上で長時間船と並走した後海中に降下し、その後の潜水艦の捜索で何も回収できなかったことから、海中に入った後に再び空中へ出て飛び去っているものと考えられる。

ドローンの操作方法は、プログラム飛行やLOS通信(無線通信)や衛星通信があるが、空中と海中双方の操縦をいったいどうやって行っているのだろうか。

これらのことから、④の可能性は消えることになる。

以上のことから、①～④のいずれの可能性もあてはまらないことから、本事件の目撃物体は⑤UFO (未確認飛行物体) であったことが判明した。

UFOは動力に化石燃料を使わず、翼やプロペラの推進力を利用せず飛行しており、物体自体が知的にコントロールされていた。

どこから来てどこへ飛び去ったのか、何のために飛来したのか・・・地球の最新鋭の技術をもってしても追いつけない高度な宇宙文明の所産であることはあることは歴然としている。

一連の事件について「故意にタイミングを合わせたかのようにみえる」とジェレミー・コーベル氏も述べているが、本事件の発生したサンディエゴ沖ではUFO事件が頻発しており、2004年には 「USS Navyニミッツ空母打撃軍11 UFO事件」が発生している。



USSキッド(DDG-100) ミサイル駆逐艦
United States Navy
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:US_Navy_110518-N-OI955-090_The_Arleigh_Burke-class_guided-missile_destroyer_USS_Kidd_(DDG_100)_is_underway_in_the_Pacific_Ocean.jpg

ドローンの形状



①　②　③

①固定翼無人機
②回転翼無人機
③複数のプロペラで飛行するマルチコプター

＜USSオマハ以外の船の遭遇状況＞

2019年7月14日：米海軍の艦船のグループは、ロサンゼルスから約 100 マイル離れたサンクレメンテ島の近く、ベンチュラ/サンタバーバラ沖のチャンネル諸島の南で演習を行った。

午後10時	USS キッド	2 つの UAV を報告。SNOOPIE チームを起動。 USSラファエル・ペラルタに状況を伝える。
午後10時10分	USSジョン・フィン	UAV目撃を報告。
午後10時10分	USSラファエル・ペラルタ	空に赤い点滅する光を目撃。SNOOPIEチームの起動を報告。
午後10時27分	USSキッド	UAV目撃。
午後11時	USSラファエル・ペラルタ	「船のフライトデッキの上をホバリングする白い光」を報告。 視界の1海里未満として定義されている低視界条件でラファエル・ペラルタと同じ速度(16ノット)で飛行(90分以上)。

7月15日：

午後8時39分	USSラファエル・ペラルタ	UAV の目撃を報告。SNOOPIEチーム起動。
午後9時	USS キッド	UAV を目撃。SNOOPIEチームの起動を報告。
午後9時20分	USSキッド	複数のUAVを報告。
午後9時40分	USSラッセル	約30分間にわたって複数のUAVの目撃を報告 UAVは高度を下げ、前後左右に移動していた
午後9時40分	クルーズ船 カーニバル・イマジネーション	海軍艦艇に5～6のドローンが見えることを通知。 ドローンが自分のものではないことを報告。
午後9時46分	USSラファエル・ペラルタ	2つのUAV目撃。
午後9時51分	USSラファエル・ペラルタ	4つのUAV目撃。
午後11時51分	USSラッセル	最終目撃報告。

7月25日：

午前1時20分頃	USS キッド	UAV目撃。
午前1時52分頃		SNOOPIEチーム活動停止。

7月30日：

午前2時15分頃	USS キッド	UAV目撃。
午前3時27分		SNOOPIEチーム活動停止。

※SNOOPIEチーム：視覚的な範囲内で船に近づく未知の接触を記録し、撮影するチーム



USSジョンフィン(DDG-113) ミサイル駆逐艦
United States Navy
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/4/4a/USS_John_Finn_%28DDG-113%29_arrives_at_Pearl_Harbor_on_10_July_2017.JPG

正式な調査が、7月17日に海軍沿岸警備隊・NCIS（Naval Criminal Investigative Service）によって開始されており、事件当日同海域にいた海洋調査船ORVAlguitaにはドローンが搭載されていたが、最大飛行時間28分の小型クアッドコプター（ファントムIV）で、最高速度72km/h、運用限界高度6,000m、船から5～10フィート以上離れた場所で操作することはできないものであり、事件発生時には稼働していなかった。

無人機が海軍自身によって操作された可能性も考えられるが、サンディエゴに拠点を置く艦隊地域管理監視施設(FACSFAC)の代表者によると、海軍はUAVをある限られた地域でしか運用していないことを明らかにし、7月14日はサンクレメンテ島付近でUAVの活動は予定されていなかったことが判明している。

UFOの目撃は、核実験場及び核施設・巨石文化系の古代遺跡・活断層の多い地殻変動帯で多いことがわかっており、本事件の発生地域は太平洋プレートと北米プレートの境界域であり、複雑な地下構造が明らかになっている。

また、サンニコラス島とサンクレメンテ島は、米海軍によって管理されており、兵器実験場及び訓練施設として利用されている。

サンニコラス島では、2019年8月18日にこれ





USSラファエルペラルタ(DDG-115)ミサイル駆逐艦
United States Navy
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/a/ac/USS_Rafael_Peralta_%28DDG-15%29_leaving_for_builder%27s_sea_trials_US_Navy_161017-N-DM751-001.jpg



USSラッセル(DDG-59)　ミサイル駆逐艦
United States Navy
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fc/US_Navy_080905-N-9079D-522_The_Arleigh_Burke-class_guided-missile_destroyer_USS_Russell_%28DDG_59%29_transits_the_Atlantic_Ocean_as_part_of_the_Abraham_Lincoln_Strike_Group.jpg

までINF条約により禁止されていた地上発射型巡航ミサイルの試射が行われた。

INF条約とは冷戦時代にソビエト(現在のロシア)とアメリカの間で中射程（500km～5,500km）の核弾頭、及び通常弾頭を搭載した地上発射型の弾道ミサイルと巡航ミサイルの廃棄を目的として結んだ条約だが、2019年8月2日に失効している。

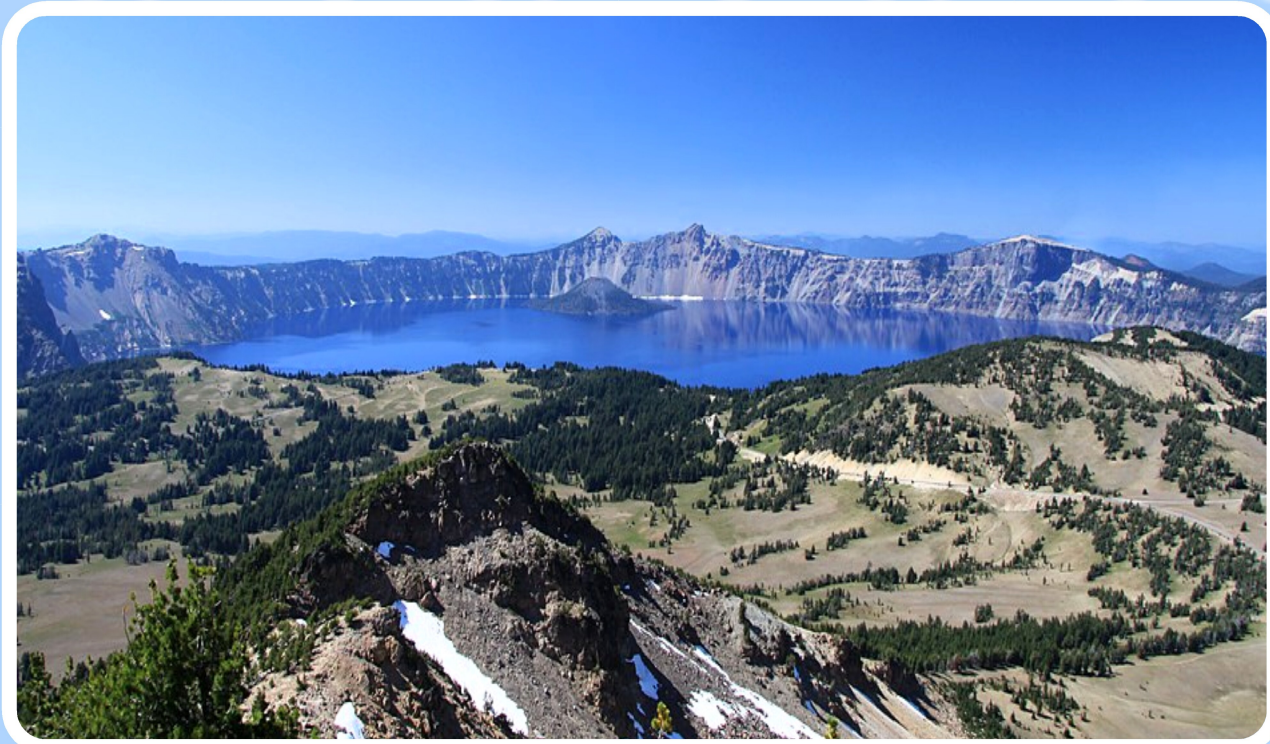
アメリカはこれを機にこれまで禁じられてきた中距離ミサイルを本格的に開発する方針を表明しており、新たな軍備拡大競争の始まりともいえる。

本事件の発生は、繰り返す物質文明への警告とも考えられるのではないだろうか。



2019年7月、USSラッセルの暗視カメラが撮影した19秒間の撮影動画中24秒目の画面。
雲の隙間を点滅しながら飛行する正三角形ピラミッド型のUFO。UAPTFにより現在調査中である。
［動画:ジェレミー・コーベル氏YouTube　https://youtu.be/-PjqdazB24］

▼Crater LaKe （クレーター湖）▼



米国西部のオレゴン州中南部に位置するマザマ山の噴火で形成されたカルデラ湖。
差し渡し8.0×9.7Km、周縁の標高2.100～2.400m、水深は国内1位の594mを誇り、UAL612便とSWA4712便のパイロット2名は、UFOがクレーターレイクの上空或いは近接する西側エリアを通過するのを目視している。
このクレーターレイクを霊地として尊敬しているネイティブのクラマス族の伝承(天と地の神の戦いの結果)と現在のクレーターレイクの状況が酷似しているという。

出典：ウィキメディア・コモンズ（Wikimedia Commons）
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Crater_Lake_from_Mount_Scott_in_2011_(2)_(cropped).jpg?uselang=ja

Aerospace News Agency Sapporo

Website ： https://aerospacenews.org/
E-mail ： info@aerospacenews.org